

アジアと女性解放

Asian Women's Liberation

アジアの女たちの会

連絡先・横浜市保土ヶ谷区桜ヶ丘112
県住公社147・五島昌子

300円



特集

買春観光を許すな！

——韓国・台湾から東南アジアまで——

女の性は商品ではない

女の人権回復にむけて 崔貞烈

レポート 観光旅行社めぐり

輸入される女たち

エコノミック・アニマル、セックス・アニマル

——各国の状況——

男たちも怒る 井上ひさし・宇都宮徳馬

武藤一羊・大塩清之助

女たちは怒る

女大学 性侵略—この現実

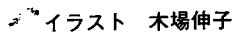
No.2

1977.10

女の体は商品ではない！

女性差別・民族抑圧からの解放をめざして！

——大東亞狂榮圈・日本男性侵略図



3

特集

女の性は商品ではない!!

買春観光—韓国・台湾から東南アジアまで

独裁政権の支柱—観光産業

「日本の男性が狂喜するフィリピン・マニラの夜」——最近週刊サンケイに載った萩原彰なるルポライターによる体験報告の見出しである（七七



・七・四号)。今年に入り二度マニラを訪れ、一日一万—二万円を「買い」、コレラ騒動にもかかわらず「この南国の都会が、いかに『日本の男の天国』かが微に入り細にわたり描かれている。フィリピンでは今なお戒厳令下という異常事態が続いていることには一行も触れていない。ましてや十万人に近い人びとが、『政治囚』として獄中にあることも、不当逮捕、拷問が日夜行われている事実など完全に無視している。この記事を読んだ読者は、フィリピンという国があたかも日本人のための『買春地帯』として存在しているかのような印象をうけるだろう。

こうした見方、感覚麻痺は、今日のアジア各国と日本の関係を端的に示してはいまいか。一九七六年一年間だけでも、台湾、韓国、フィリピン、タイへの日本人観光客は一二五万人に達したといわれる。その大半が男たちといって過言ではない。しかし訪れた先きが、日本男性のためにある国ではなく、圧倒的に貧しい民衆が人間らしくいかに生きるべくたてたかっている国々であることさえ、彼ら観光客の目には映らないしくみがつくられているのだ。フィリピンは今年の九月で戒厳令が布告されて五年目を迎えた。この五年間、この国の人びとはいつさいの市民的自由を奪われてきた。マルコス

大統領はこの国に「平和と秩序」を回復し、「新社会」を建設すると称して戒厳令を国民に押しつけたが、「新社会」とは政敵を排除して独裁体制を確立し、一握りの資本家と結んで利益を独占し、米国と日本という二大国への依存と従属を深めることに他ならなかった。五年の間に貧富の格差は縮まるどころか拡大し、農民は土地を奪われ、都市のスラム人口は増え続けた。政府の統計すら子どもの人口の六〇—七〇%が栄養不良であることを示し、実質的失業者は二五%を越す。

戒厳令体制を敷いたマルコス政権が、力を入れたのは、土地改革でもなければ国民のための開発でもなく、軍事力の増強と外貨導入政策、そして観光政策であった。軍事力増強は、フィリピン共産党指導下で武装闘争を展開している新人民軍と対抗するためであり、同時に、フィリピンを重要戦略基地とするアメリカのボスト・ベトナムのアジア戦略に沿ったものである。実際一七千エーカーという広大な土地を無償で米軍に提供しているフィリピンは、年間二億ドルの収入を基地から得るという基地依存型の経済をも脱していない。その多くは米軍基地周辺で働く女たちの稼ぎといわれる。

外資導入政策については、同国にたいする外国資

とるため、所轄の役人にどのようにワイロ工作を行なったかを報告したものである。

七年だけでフィリピンを訪れた外国人観光客は五〇万二千人。うち日本人は約四〇%（約二〇万、八〇—八五%が男性である。一五万人の日本人男性が三泊四日程度で約一五万円を使うとしても一千万ドルに近い外貨収入となる。韓国の文部大臣ならずとも、観光客相手に稼ぐ女性たちを、「国家の経済建設に貢献している愛国的女性」と称賛したくなるにちがいない。

この八月、ASEAN五ヶ国とビルマを歴訪した福田首相は、総額四千億円といわれる「援助」を約束して帰国した。フィリピンにたいしても二九四億円の援助に加え、CTS建設計画などいくつかの開発プロジェクトへの協力を約束している。しかしこの二九四億のうち無償援助はわずか一九億（六・五%）、残りは円借款の、日本側からすればもうけるための商売である。いずれにせよ無償・有償を問わず、日本の出す金がマルコスという独裁者を助けるものであり、決して民衆の生活を豊かにするものでないことは明らかだ。そしてこれは何もフィリピンだけに限らない。タイも、マレーシア、インドネシア、シンガポール、すべて、そしていうまでもなく韓国も、民衆の政治的自由を抑圧し、買弁資本家と多国籍企業の代弁者である軍事政権、独裁政権の下にある事実から目をそらすことは出来ない。米国の軍事経済「援助」も日本の「援助」も、こうした政権を支えることによつて、日米両国のアジアにおける地位を確保しようとするものに他ならない。「観光買春」はこのようなアジア諸国と日本の関係を補完するもうひとつの「侵略」であり、人権をふみにじる行為である。

（加地永都子）



キーセンパーティーする日本の男たち

本の投資額が戒厳令の前年の四千三百万ドルから、戒厳令布告後には七千三百万ドル、一億九千八百万ドルと急増した事実だけでもそのすさまじさがうかがえる。とくに日本についてみると、外国投資全体の中で日本が占める割合が、一九七〇年にはわずか三・六%だったのが七五年には四〇%に達した。ことひとつをとっても、戒厳令という政治状況が日本の進出企業にとっていかに都合のよいものであるかを示して余りある。

国際収支の赤字や外債を、自立経済へ向うことによつてではなく、世銀やIMFなどの国際金融機関からさらに金を引き出し、国内ではもっとも手っ取り早い外貨獲得の手段として観光客を呼び

なさない
日本の男たち

イン タフ フィリピン 韓国 台湾 レポート

タイ・フィリピン

バンコクの夜は、点滅するネオンの中に、「熱海」「小百合」等の日本名トルコ風呂が目につく。これは、日本人観光客の如何に多いかを物語っており、「タイの最大産業の一つは女である」との、タイ政府高官の暴言も外貨獲得第三位の観光収入が、観光客による買春によって支えられている事を物語っている。

バンコク市内のトルコ風呂に足をふみ入れた時一瞬、その場の情景が正視出来ず、足がすくんだ。暗く、広い空間に、二〇名以上の男性が一方をのぞき込んで立っている。ホールの方に、そこだけ照明が明るいショウウィンドーの、赤いジュウタンを敷いたひなだんに、女性が一〇名以上も、あたかも商品として鎮座(?)していたのである。


街へめつたに出ずに観光地を回り、夜の為エネルギ―をたくわえる」と、観光、即ち、観光買春の図をはつきり描いてみせた。

街娼や学生売春グループは別として、前記の店で働く女性には、マニラ市長発行の許可書を所持しなければならないが、月二回の性病検査が義務づけられる。もしプラス反応（感染）が認められると、医師がライセンスを保持し、三日投薬後、マイナス反応を確認したら、再び店に出られる。しかし、一つの店から、プラス反応が多数出るのは営業チエックにつながるので、最近では、定期検査日の三日前に、関係をつけた病院で検査を受けさせ、プラス反応の者には薬を飲ませながら働かせ、定期検査日にはマイナス反応が出るように工作している店もあると言う。

パンコクと同じく、マニラでもサウナバスではひな段に座つて客の指名を受け、ナイトクラブでは男性トイレの奥の部屋に、胸に番号札をつけた女性が、トランプやレース編みをしたり、テレビを見たりしながら客がガラス戸を通して指名するのを待つ。カクテルラウンジでは、側に座る女性との個人交渉が成立すれば、店主に約四〇ペソ（約一、八〇〇円）支払つて外へ連れ出せる。日本人は彼女達へのチップに糸目をつけない事で定評があり、それに応えて彼女達も、外泊の際には客の靴下や下着まで洗濯をしてのサービス振りに、年に数回も通う観光客が増えていると言う。

彼女達の生活環境は、ほとんどが地方から職を求めて出て来た者である為に、個人の住居を持っている者は少なく、スラムに居住したり、店の寮に住んでいるが、寮と言っても十六平方メートルの部屋に二、三〇名も収容している。食事は寮内ではできず、近くの食堂（同じ店主経営が多い）

語っていた。彼女の収入は実働一〇〇時間（但しシヨウウインドーの中の時間は含まない。）で五〇〇〇パーツの収入が保証され、一〇〇〇時間を越える働きは歩合制、それに客からのチップが、合計五〇〇〇パーツになる。（この額は、二年前まで露店で青果商をしていた時の五倍。又、タイの大学卒男子の平均月収の三倍に当る。）夫と離婚後子供を育てる為にトルコ嬢になり、今では、母親を田舎から呼び寄せて生活出来る様になったが、母親には、レストランのウェイトレスをしていると言つてある、との事だった。



日本人客については、チップの払いが良い事を強調し、それ以上は語りたがらない。今の店も、以前働いていた「小百合」経営者は日本人だった(との事)等も、ほとんどの店が百人以上の女性が働いている。彼女は、週一回の性病チェックとビルの服用を守っているから、病氣も妊娠も大丈夫だが、他の人は性病や妊娠中絶で休んだりしているという。ショウウインドーから指名で出て、二階以上の個室に入るか、客が一時間六〇パーツの割で支払えば、外に連れ出せる。まだ、指名せずに立っているのは、自分の好みの女性が下りて来るのを待っているのだ、との話に、薄暗いホールの男性方をふり返った時、突然お店全体が停電になりざわめいた。しかし慣れたもので、テーブルにローソクが置かれたと同時に、ショウウインドーの中の女性達にも、ローソクが握られれていた。そして、約一時間後に店を出るまで、停電の中で営業が続けられた。



で、普通より二、三倍高い値段で食べざるを得ない、等と実情を聞くと、暗いイメージはなくなるとも、うまく仕組まれた管理売春である事は明らかである。

カクテルラウンジで会った女性は、夫がピストルで撃ち殺されてから、子供を育てる為に手芸工場で働き始めたが、父親のガン手術費用の為に、昼間の仕事に加え、三ヶ月前から夜の仕事に入った。お金を使わない為にと、ドレスも自分でぬつて着ているが、（「暗いから下手でも見分けがつかないでしょう」と首をすくめた。） 昼夜働きづめで疲れるのでつい浪費してしまいます。もうすぐ昼の仕事は辞めるが、将来はミシンを買って、ミシン刺繍で自立したいと語っていた。しかし、低賃金の女子労働者を安易に得られる手芸工場をやめて、彼女の商品が正当な価格で売れる商業システムを見つけ出すのは、ほとんど不可能に等しい。（現在の収入、昼午前八時から午後五時で一ペソ 夜六時から午前一時で二〇ペソ十チップ）

女性の視点から、東南アジア諸国の状況を見ると、日本の経済侵略によって心身を収奪されているアジアの女性達の姿がうきばりにされてくる。それはまるでパラノスよくあやつられたヤジロベエの両端の様だ。一方は、日本企業の下で低賃金悪質な労働条件にあえぐ女子労働者、他方は、一片のライセンスで偽りの誇りを持たされ、日本人観光客や商社マンの払う高いチップにつられて、性的サービスに励む女性達。勿論、各々の国の他国籍企業誘致政策や観光政策がヤジロベエの頂点で両端をあやつっているが、しかし、視点を変えれば同じ頂点に、日本の経済力をバックにした企業、男性、それに、全てを黙殺する日本女性がい

スラムに案内してもらったが、今日、一家族が出た所に、明日は三大家族が移り住んでいる程、生活苦の為地方から出て来る数は多く、売春婦たちの最大供給源となっている。このスラムで、最高の女性の内職は、学生服の下請けで、一枚五バーツ（七八円）を一日中ぬい続けて五枚で二五バーツ（四〇〇円）、一ヶ月七五〇バーツ止まりである。又、バンコクで女子労働者の平均賃金は一日二五バーツだという。この様な極端な経済的アンバランスが、売春への転向を容易にしている社会構造の一面を示している。

バンコクから、香港経由でマニラ空港に着いたのが夜八時、次の便で来る予定の荷物を持つ二時間、到着した背広姿の日本男性観光客の大部分が、幾台もの冷房バスに分乗して、マニラ市街へ消えて行くのを見送った。一日平均二千人（コレラショックの後は、逆に三千人）の日本人観光客が、数の上で他国をぬきトップであるのも、あの大群を見るとうなずけるし、入って見たカクテルラウンジやナイトクラブも、日本人客でにぎわい、ホスピタリティーガール達も片言の日本語で応待に必死だった。

觀光収入が外貨獲得第四位となつて、フィリピンの経済振興に一役担つてゐるのは、その数九千八百人と言われるホスピタリティガール達やマッサージガール達の、五百軒以上のナイトクラブ、カクテルラウンジ等や、約九〇軒のマッサージクリニクやサウナバスでの働きに負うものである。在比二〇年の或る方は、「一日に千人の日本人顧客が来るとして、その内百名は女性、九百名の男性の内百名はピースフル（何事もなく？）に眠るだろうが、残り八百名は必ず夜の町にくり出す」しかも、彼らは、昼間は冷房バスの中から暑い市

男たちも怒る

日本の男は卑怯だ

井上ひさし
(作家)

オーストラリアに行っていたとき、向こうの主流新聞の広告欄に、そこだけ日本語で「日本人の方には秘書のサービスします」なんて書いてある。これは夜のつき合いのことらしい。「今週のシドニー」などというパンフを開けると、これもまた日本語で、オパールや毛皮屋の広告に「ことばできる人います」。それに「エスコート・サービス」などがある。つまり、日本人観光客はオーストラリアへ来て、女遊びして、奥さんにオパールと毛皮買って帰るというわけ。本屋のボルノコーナーには日本語で「立ち読みおことわり」なんて書いてあるし、キングクロスという歓楽街へ行くと、夜の女性たちが日本語で「ダンナ、ダンナ」なんて寄ってくる。オーストラリアの売春は日本が発売したんじゃないかなどと思うぐらいで、向こうの新聞が論説で、女子高校生の日本人相手の売春問題をとりあげたりしていた。

日本民族の民度の低さというか、経済大国などと偉そうなことをいって、英語もしやべれず、金バラまいて女を買いに行く。オーストラリアあたりまでこうなんだから、東南アジアや台湾、韓国などには、もっと行っている。ぼくはとくに四十年代、五十代の男が韓国に遊びに行くことは許せない。言葉や名前まで奪うなんてひどいことをしておいて、堂々と女を買いに行けるその心境、全く卑しむべきだ。ぼくの知り合いにも、韓国や台湾に特定の女性がいて、しょっちゅう通っているやつなんかいる。そういう国の女性たちに対して、



る。日本の妻達が観光買春に、むしろ寛大なのは、単に夫達の行状の実態を知らないからではなく、夫の国内での情事より、ふりかかってくる火の粉が少ない事を承知しているからではないだろうか。これは日本の妻達が、自己の安泰の為にアジアの女性を手段化している事になる。

アジアの女性達から、日本の女性は、男性達の行状を知っているのか、どうして男性だけで来るのか、その間、妻達は何をしているのか、等と幾度も聞かれた。ヤジロベエの両端の様に、女性は、自国でも、他国との関係でも、用途によって分断され、更に、女性間の断絶をも起こしているのが現実ではないだろうか。女性の人間性の中で一体であるべき「性」が、産む性（家庭）、働く性（労働力）交わる性（売春）等と分断され、お互いは、社会的、精神的に隔絶された状況の中で、互いに他を否定しつつ、自らを主張しようとして自己矛盾を起している。中心によって揺れ動く事はあっても、一体とはなり得ないヤジロベエの両端を見ていると、分断された性を両端にかかえもつ女性総体の姿にも見えてくる。

このヤジロベエの構造に見る、政治的、経済的状况が、日本を含め、アジアの女性達の生きている現実である事を自覚する時、お互いの断絶を越えて、日本の私達と、アジアの姉妹達の連帯が生まれてくるのではないだろうか。（高里鈴代）

韓国

ソウルの町では、週末になるとゴルフバッグを

ならず、カジノやナイト・クラブ、土産物店までがそのような女性の供給の場になっており、夜の女たちのために偽の学生証を発行するところもあって、学生を偽装するケースも珍しくない。

ビジネスをかねて、特定の現地妻と契約同居している日本人、現地妻のもとに足しげく出入りする中年男も多いとか。（雑誌新東亜一九七六年七月号、ルポ「観光韓国」）

日本人はビジネスと女遊びをかねている。朝のホテルで、アタッシュ・ケース片手の日本人と美しいアガシ（娘）が別れを惜しんでいる光景はみるにたえないと、ある韓国人はいう。韓国の観光は、リピーター（何度も往復する人）がふえたという旅行社のことは裏書きするように、入会金五十万円で、二年間に十回往復の航空運賃と毎回二泊六食無料サービスというリクリエーション・クラブさえ存在する。

観光の外貨獲得率は九〇%以上であると韓国政府はいつているが、ホテルの建築には日本の大手建設会社の海外部門が、マネージメントには日本のホテルのり出し、お客はJALパックやルックで送りこまれるのであれば、その利益は本当に韓国の人たちに還元されるのだろうか？

日本人旅行者がマッサージをたのむことが多いので、最近ではマッサージ売春も少なくなると、婦人更生事業の関係者がなげいているが、本当に日本人のセックス・アニマルぶりは止まるどころを知らないというのか……ソウルの町や空港で見かけた日本人客を思い背筋が寒くなる。（山口明子）

台湾

楽しい海外旅行は、日本の旅行会社、現地の旅

肩にした日本人男性が目につく。ソウルに来る観光客は一日平均三千余名、週末になると一挙に四千人にふえる。その七割以上は日本人であり、七千近い市内の観光ホテルの客室でも不足で、当局は、小さな一般の旅館まで臨時観光宿泊業者に指定するさわざである（七七・九・四朝鮮日報）

韓国政府は一九七五年、外国人観光業を輸出戦略産業に選定し、種々の特惠を与えているが、今年にはさらに「百万名観光誘致作戦」と銘打って、韓国国際観光公社、大韓旅行社（KTIB）はじめ大手の国際旅行社が集まって組織する韓国国際観光協会（KATA）を先頭に大がかりな広告のキャンペーンをくり広げている。

韓国政府は全国に観光ホテルの施設改修のため三百億ウォンの支援をしており、古都慶州（キョンジュ）付近には、二つの国際観光ホテル——一つは日本人向き——の建設計画がすすめられている。一九八三年の完成時には年間六十万の外国人客を誘致するという「済州島開発十年計画」は、着々とすすめられている。済州KALホテルはじめいくつかの観光ホテルが店開きし、大阪からは週三便、飛行機で直接観光客が送りこまれている。たしかに、日本でも韓国でも旅行社は、表向き健全で文化的な観光を推進している。

だが、日本人観光客のめざすのは、やはり女だというのは、今でも変らぬ韓国での評価のようだ。ソウル市内で観光客を相手にする女性たちの数は関係当局の推計によれば観光協会に登録された「サービス・ガール」二千余名、ソウル市内の会賢洞（ホエヒョンドン）、筆洞（ビルドン）、楽園洞（ナグオンドン）などに移っている夜の女たちを含めて、一万余名にのぼるとみられる。

韓国式料亭と名をかえたキーセン・ハウスのみ

行会社、それにお客さんの三位一体で作りあげるもの。台湾の旅行の場合には、特にこの中の現地旅行会社の存在が大きく浮かび上がってきます。

現在、台湾には政府の認可を受けた旅行社が約三百社あります。このいずれもが、最大のお得意さんである日本の観光客の取り合いで、日夜熾烈な競争をしています。運良く、日本の観光団を引受けても、最初から利益を計上して取り引きしている会社は一社もないはず、全部が赤字で引受けているんです。驚きますね。

しかし、彼らも仕事ですので、どこかで穴埋めをして利益を上げなければなりません。これをナイトツアー（女）と買物のコミッション、それに高いオプション旅行とで埋め合わせるわけです。ところで台湾という所は、ホテルへ日本人観光客が着くや、ボーイの第一声が「オ客サン、イイ女イルヨ、今夜ドウ」、ロビーに降りると、ボン引きが「デパートガールイルヨ、二万デイイ」、タクシーに乗ると「友達ノイイ女イルヨ、ドウダ」、食事に行っても……、親戚、知人の紹介の現地人も……、etc. どこへ行ってもこの調子です。

もちろん、現地旅行社も黙ってみているわけではありません。お客さんをスカしたり、だましたり、その連中に対抗しています。たとえば、空港に着くと同時にお客さんをバスの中にカンヅメにして、市内観光もそこそこに、これも台湾観光のひとつです。とお客さんをキャバレー（男性天国台湾というのはこの女性）にぶち込むんです。後はやり手婆が料理するという段取りです。要するに、町中のボン引き共から自衛するために、客を外気にふれさせないで商売をしてしまうんですね。……（漫画アクション九月一日号より）

「日本人の方がエライ」というような妙な心理があつて、「征服してるんだから、女性上位なんか許さんぞ」みたいな態度をとっている。

韓国や台湾にあきた連中が、こんどは東南アジアへ殺到しているようで、フィリピンなんか、セックス客を迎えるために、空港の日航のカウンターを何倍にも上げたという。タイに行ってきた知人の評論家が、女遊びし過ぎてトロントたれきった目つきで「井上君、タイはいいよ。一度行つてごらん」と言つたので、そのときから軽蔑したくなった。

全く救いたい国だ、日本は。日本の女がこわくなってきたからかどうか知らないが、日本の国内でやれないことを、外へ出て、やりたいだけやっている。とにかく、日本の男は卑怯だ。だけどそんなことを許している日本の女も、どうかしている。奥さんたちは想像力がなくて、享主が外国で何やってるかもわからない、それに外国の女と遊ぶならいいなどと認めたり……。日本の男がダメなら、日本の女もダメということだ。ぼくは、女性に対しても、はつきりものを言いたい。

朴政権つづす以外ない

宇都宮徳馬（衆議院議員）

キーセン観光には二種類あるようだ。一つは、観光客に女を買わせて外貨かせぎをやっている。日本人の男はキーセンのために韓国に行くんで、これがなければ半減するだろう。中小企業の経営者などが向こうへ行つて、一晚三万円だとガイドからすすめられた。ガイドがいうには、このうち八割は国防に献金するんだから、日本は韓国に守られている以上、税金のつもりで女を買いなさい、だそうだ。

もう一つは、外国の政治家なんかタグで女を提供する。つまり、経済援助をもらったりする交渉に、女を政策の手段として使うわけだ。こういう場合のキーセンは、何力国語もできて、国から高給をもらつて、日本とか、アメリカの政治家にサービスする。

観光客相手の外貨かせぎにしても、政治家への饗応にしても、どちらも女性に売春させて目的を達成するなんて、ひどい政権だ。権力者はあざ笑いながらこういうことをやっているわけだが、かわいそうなのは、そういう手段に使われる女の子なのだ。韓国の若い青年たちも怒っている。こんなひどいことをやる政権の体質はなおらないのだから、朴政権をつづす以外ないということだ。

ただ、日本の男も困るね。こういう政策に乗つて、キーセン買いに行くんだから。まるでけれどもの同然だ。日本の女性もつとつかりしてもらわないと困るよ。

聞きしにまさるフィリピン

武藤一羊（評論家）

今年六月フィリピンへ行き、マニラのタワーホテルという中級ホテルに泊った。電話がこわれていたので、歩いて五分ほどの一流ホテル、ヒルトンへ行こうとした。外へ出たとたん、若い男が寄つてきて「ヤスイヨ」「イイ女イルヨ」「病気ナイヨ」などと日本語で言いながら、ついてきた。知らん顔しているのに、つきまといつて離れないので「ノ、サンキュー」とどなつてやった。すると、日本人のくせに興味を示さないのがおかしいとでもいうように、そのボン引きは「けしからん」と怒っていた。

女性の人間回復のために闘い続けて

——在米韓国人崔貞烈夫人は語る——

八月十二日から十五日まで「海外韓国民民主運動代表者会議」が東京で開かれました。この会議に出席するため来日された、米国ワシントン在住の崔貞烈(チェ・ジョン・ヨル)夫人はクリスチャンで、戦前から一貫して女性解放を目ざして、とくに売春婦の人權を守る活動が続けてこられ、米国へ移り住む直前の一九七一年秋、いち早くキーセン観光反対の叫びをあげるなど、この問題に深い関心を寄せておられることを知り、貴重なお話しを聞かせていただきました。三十年間使わなくて忘れたという日本語で一生けんめいに話され、「一緒に闘いましょうね」と固く握手されました。きびしい運命にめげず闘い抜いた一人の女性の歩みを、聞き書きの形で、紹介したいと思います。

(聞き手、松井やより)

戦前、日本に留学し、結婚してからも住んでいましたが、夫は朝鮮人だということで、いつも警察から迫害を受けていました。太平洋戦争が勃発する直前の一九四一年秋、夫の郷里である、鴨緑江に近い恵山鎮へ帰りました。地主階級でしたが、夫は抗日独立軍に加わって、しばしば日本の官憲にとらえられ、電気拷問にかけられたりしました。私の母も、独立軍に資金を出したということで、四年間も投獄されました。

しかし一九四五年、祖国はついに独立しました。私は、若いときから女性の解放に関心があり、女性の権利のために働きたいと思っておりました。人間回復した女性たちを、全く別の地域に送って、工場などに就職させたのです。それは、過去を知らせないためで、こうして仕事に励んで、責任あるポストを与えられる女性も多く、また幸せな結婚をした人も少なくありません。

国全体としても、男女平等がどんどん進んでいきました。女性の地位を引き上げるために、少しぐらい能力的に劣っていても、郡とか地方自治体の首長にどしどし登用されましたし、また家庭内でも、それまでの妾を持つ習慣などは一切禁止されて、夫婦平等になりました。

ところが五年後、朝鮮戦争で、南へ来てしまったのです。米軍が原爆を落とすから、避難するようというので、三人の子どもたちを引き連れて、一九五〇年暮れ、ソウルへたどり着いたのですが、夫とはそれ以来、離れ離れになってしまいました。母子の生活は大変でしたが、一九六〇年の四・一九学生革命のあと、米軍兵士相手の娘たちの状況を見て、何とかしてやりたいと、更生事業をまた始めました。公娼制度は法律上はなくなりましたが、事実上は残っていて、そのころ全国で六十万人もの売春婦がいたのです。そのうちざつと七、八万人は、米兵相手の基地の女でした。貧しいた



崔貞烈夫人

で、祖国の解放とともに、満州(現在の中国、東北地方)をはじめ、各地から何万人も引き揚げてきた売春婦の更生の仕事にたずさわったのです。日本にいたときも、人間の尊厳を踏みにじられていて、こういう女たちの状況を知りたいと、各地の遊廓などをまわったりしたこともあり、この仕事を選んだのです。

独立の翌年、男女同権の法律が制定され、抑圧されていた朝鮮の女性は解放されました。男性に肉体を売る女性たちも人間らしく生きられるようになると、教育省成人教育部が、彼女たちの社会復帰のための教育訓練を行なうことになり、私は咸興という都市で、約千五百人の売春婦の面倒をみたのです。男性の教育担当者たちは、こういうことに関心がなかったもので、私が提案して、女子教育の一環として始めたわけです。十五才くらいから四十才ぐらいの女性たちですが、女郎屋に売られて、男相手に肉体を提供するという非人間的な生活を強いられ、心までずきみきっている女性も多く、人間として立ち直らせるのは大変でした。

公営食堂のウェイトレスとか、昼間は軽い仕事をし、夜は学習ということで、まず字を教えることから始めました。何しろ、ほとんどが文盲だったからです。字が読めるようになると、新聞などを読ませ、国が独立したことを知らせ、目ざめさせるようにしたのです。先に目ざめた女性たちが、自分たちで仲間を目ざめさせるという自主的な方法をとりました。こうして、半年から一、二年で人

めに、こういう境遇に追い込まれたわけで、何とかもたない仕事につけるようにと、昔、日本人が使っていた古い建物を借りて、職業訓練をすることにしました。

まず、新聞に広告を出したら、全国から六十人ぐらいの女性がやってきたので、洋裁とかタイプを教えました。費用は各方面から募金を集め、また、友人たちがボランティアで先生になってくれました。政府からは、もちろん一銭の援助もありませんでした。

ところが、一年たったら、朴・軍事クーデターが起こり、この職業訓練も禁止されてしまいました。「北からの金でやっている。アカだ」と、KCIAに引っぱられて、拷問を受けました。しかし、出所したあとも、三十人ぐらいの女性たちは私を「お母さん、お母さん」と慕ってくれるので、彼女たちをバイブル・スクールに來させ、何人かは結婚もさせました。

自分ホテルへもどると、夕方、三十人ぐらいの日本人の団が、ガイド付きでドヤドヤと到着した。四、五十才の中年男性で、ロビーで部屋割りなどやっている。いい背広をバリツと着込んだ、その一団の連中のウハウハウれしそうな顔。まるで無礼講でハメ外した雰囲気、いかにも、これから女遊びに出かける、というようなはしゃぎかたで、こつちが顔をそむけなくなった。

私のところにも、ホテルのボーイが来て、「一人か? 女の子はいらないか?」なんて言う。日本人の男は必ず女が目的とも思っている様子で、フィリピンも、聞きしにまさると思つた。こういう場面で、日本というものがよく見えてくるのだ。

勤労女性への誘惑

大塩清之助(牧師)

ソウルの裁判所で学生の裁判を待っている時、同行した長老会のP牧師がこんなことを話しておられました。近頃、いろいろな工場に化粧品の間販売が盛んになっている。現金でなくとも、月賦でいいというので、長時間労働で疲れ果てた女の子たちがちよつとした気ばらしを求めて化粧品を買いこむ。その支払いができないために外国人相手に売春をするものがふえている。日本人客が一万円くれたそうだったような話題もすぐ拡まります。

余暇を楽しむ余裕もない暮らしの中で手近な楽しみに誘惑される若い女子労働者をせめるよりも、そのようにさせている日本男性の性侵略の方が責められるべきだと思います。

(以上、四人から聞き書き)

最近ワシントンに來られた日本の政治家から聞いたのですが、知り合いの老人が韓国へ行ったら、空港で若い女性が寄つてきて、ホテルまでついてきたというのです。「ぼくは年寄りだから」とこと

わると、その女性は「これは国策なので、国家から義務としてやらされている。お客さんから百ドル受け取って、そのうち私がもらうのは二十ドル。残りの八十ドルは韓国と日本の安全保障のために使うのです」と答えたそうです。それに、日本の女性の中には「夫が性病をうつされると困るから」という理由でキーセン観光に反対している人もいると聞いて、憤慨したのです。では、キーセンをしている女性たちの人權はどうでもいいということなのでしょうか。

とにかく、女性たちが外国人にこびを売り、体を売ることを権力から強要されている、こういうことが一日も早くなくなるように願っています。あまりにもつらいことだからです。女性が、お金のために体を売るといふことは、北朝鮮ではなく、なりました。女性たちは、ひたいに汗して働いて生きているのです。この点は、南と対照的です。北で解放前、地主階級だった私は、三百万坪の土地をとり上げられましたが、その結果、このように女性が解放されたことを思えば、決して惜しいとは思いません。

人類の半分は女性なのです。女性解放がなければ人間解放ありません。私は今、ワシントンで銀行に勤めて細々と暮らしていますが、女性解放のために、これからも闘い続けるつもりです。日本の女性のみならず、一緒に闘いましょう。

(一九七七・八・一八 東京で)

かくされる買春観光

—旅行業者を歩いて—



日本人の朝鮮女性に対する買春は戦前も現在もその本質は変わらない。写真は植民地時代に、日本軍により本国から強制連行された「朝鮮女性従軍慰安婦」たち。
毎日新聞「1億人の昭和史」より

私たちは、最近東南アジアの国々から帰国した多くの人たちから日本男性がすごい勢いで女を集団で買いに行っていることをよく耳にする。四年ぐらい前は、買春観光といえば台湾、韓国と相場が決っていたが、それが最近では猛烈な勢いで東南アジアの国々へと拡がっている。いったい日本の男たちとそれを送り出す旅行業者は、どんな仕掛けでこういう旅行を行なっているかを調べたいと旅行業者を実際に訪れたり、電話取材したりした。取材対象は、一九七四年に韓国政府から業績があったと表彰された旅行業者八社（東急観光、日本交通公社、日本旅行、名鉄観光、近畿日本ツーリスト、日通航空、東武トラベル、東邦トラベル）といくつかの中小業者である。まずアジア各国への送客数、観光コース（ナイトコースのあり方）現地代理店名と契約数、客種、募集方法、添乗員の実情などを聞いたが、企業秘密を楯に取られ、はつきりした数字等は聞き出せなかった。

東急観光

日本基督教婦人矯風会が一貫して売春問題に取り組んでいる高橋喜久江さんが、以前「キーセン観光に反対する女たちの会」で抗議などをした関係で顔なじみもあるので、すぐ面会に応じてくれた。部長のほうでは東急の一九七六年の総客数は十七万人くらい、うち六割が東南アジア（韓国を含む）で、前年に比べて増えているという。客種は団体、パッケージ、ビジネス等がほとんどだが、最近では団体旅行より、パッケージ旅行が増えている傾向だ。もちろん東南アジアは圧倒的に男が多く、逆にヨーロッパは、七割が若い女性だという。各国で二社以上の現地業者を下請けに使っていて、なにかトラブルがあれば、すぐ取引停止をする。また中国との関係で台湾は取り扱っていないように、子会社や下請け会社が台湾旅行を扱っている。年間五二万人が台湾に行っているのに、大手がだまつて見ているはずがないのである。他の大手業者も、このような下請け会社を作っていると推測される。もちろん台湾ルートだけでなく下請けは他の国に対しても進んでいると思われる。そこでも中小業者の激しい競争が行なわれている。そうしたことに気が付いたので、中小業者への電話取材を試みた。

中小業者S社に聞く

「十五人ぐらいのツアーで韓国か台湾に行きたい」と言っている聞いた。

—— ああ、値段はどのくらいからありますか。
S社「そうですね。まあ安く行くのでしたら、二泊三日の韓国が六万六千ぐらいからです。台湾は三泊四日で八万八千ぐらいからです。」

—— そんなに安いのですか。他の業者にも、電話で聞いていたのですが、もっと高いですよ。S社「そうですね。大きな旅行社ですと、一流ホテルに泊りますからまあ高いと思います。でも韓国あたりですと、安くしろといえれば、もっと安くなりますよ。お客さんのご予算に応じるよう勉強いたしますよ。まあホテルと食事の値段を落せば、なんともできますから。そのぶん男の人は夜を楽しめばよろしいし、女の人は三人だったら、その間カジノがあるウォカールビルにでもいけば、けっこう楽しいですよ。まあなんとでもなりますよ。」

—— あの聞きにくいことですが、男が十三人も行くので聞いて下さいと言われたので聞きますが、キーセン観光をしたいといっているのですが、費用はどのくらいかかりますか。

1976年 日本人旅行者の男性率

(法務省入管局調べ)

	総数'76.1～12	'75年比	男	女	男性率	女性率
総数	2,852,584	115%	2,120,898	731,686	74.3	25.7
台湾	434,240	121%	404,362	29,878	93.1	6.9
韓国	403,654	126%	380,575	23,079	94.3	5.7
香港	348,052	111%	244,781	103,271	70.3	29.7
フィリピン	109,318	91%	92,114	17,204	84.3	15.7
タイ	73,983	105%	60,474	13,509	81.7	18.3
シンガポール	44,105	122%	33,385	10,720	75.7	24.3
インドネシア	38,353	151%	30,099	8,254	78.5	21.5
アメリカ	916,038	116%	551,410	364,628	60.2	39.8
フランス	121,207	111%	65,092	56,115	53.7	46.3

ないという。かんじんのナイトコースに関しては「添乗員は絶対に現地女性などは斡旋しないし、東急系のホテルには現地女性などは絶対に入れない」と終始一貫して言っていた。しかし最後に彼は、そうしたことの無いよう添乗員のチェックを、覆面パトロールしていると言っていた。これは何を意味しているかという、以前、女性を斡旋した添乗員がいたのである。もちろん、抗議されて会社側はその添乗員を処分したそうだが、でもそうしたいわく付きの旅行社なのだ。

名鉄観光

あらかじめ営業部長に約束を取って出かけてみたら、部長は約束を守らず逃げてしまっていた。しかたがないので現場担当の係長と話したところ、現場のことをいろいろと詳しく話してくれた。彼は、主にヨーロッパ方面が多いということで、東南アジアには二回程しか行っていない。客種などは業界の視察旅行とか官庁の海外視察など主に専門的な分野での旅行が多いという。東南アジアの買春観光については、現地の業者が当然のように日本男性の注文に応じているという。日本からの添乗員は、東南アジアなどには付かなくて、羽田で客を送り出すとあとは、現地の空港で現地業者に受け取ってもらう「キヤッチボール方式」がほとんどなので、当方は買春観光などには責任がないと、現地業者への責任転嫁をしていた。

日本旅行

「アジアの女たちの会」で、面会を申し込んで行ったら、開口一番、「日本女性党と関係があるのですか」と、逆に質問されて思わず笑ってしまった。女性解放といえば中ビ連と思うのは、一般の人たちの認識であろう。なんとも、なさけなくなってしまう。さて日本旅行では、これからはヤンS社「まあ、韓国ですとパーティが一万円ぐらいで、あとの夜の付きあいは、一泊一万二万円ぐらいです。台湾は少し高く、一泊二万四千円ぐらいですよ。まあ、あちらの女性は、サービス満点ですから、日本で遊ぶよりか、よっぽどいいですよ。サービスの仕方が違い

ます。まあ男みょうりにつきます。とくに韓国では」(ここで業者の本音が出た。私は怒り心頭に発したが、おさえて次の質問をした)「その手配などは、おたくでやってくれるのですか。」

S社「いやあ、その旨連絡しておけば、現地の業者がきちんと準備してくれる。まあ一人につき、二ドルから三ドルのリベートは払っていただきますが、でも安いものですよ」

「あ、おたくの経営規模はどのくらいですか。一応大金を預かるものですか信用のおける業者でないと困りますのでお聞かせ下さい。さしつかえなかったら。」

S社「うちは嘱託三人とあと社員七人の合計十人で運営しています。それから一緒に商社会社もしているんです。お客さんぜひ一度こちらに、足をこんで下さいよ。予算のことも、なるべくそちらの意向に添うよう努力しますから。ぜひ来て下さい。」

とこんな会話を交わしたのである。業者間でも競争が激しいのか、「きつと満足のいく旅行にします」と何度も強調していた。

日本の海外旅行は、この不況をものともせず毎年増大の一途をたどっている。とくに東南アジアや韓国は地理的にも近いので、去年に比較して十一%も増えている。それにもなう業者間の激しい競争が行なわれているし、新しい市場(男性中心から女性、ヤング)の開拓と売りこみ合戦が続いている。とくにパッケージツアーの売りこみはたいへんなもので、私達が回って得たパッケージツアーの主な名前だけでもこんなにある。ルック(日本交通公社)、ジェットツアー(世界旅行)、マ

ッハ(日本旅行)、JALパック(日本航空)、センチュリー(アジア旅行開発)、ホリデイ(近畿日本ツーリスト)、パノラマ(名鉄観光)、ユニック(東武トラベル)、トップ(東急観光)、ズーム(小田急トラベル)、キング(京王観光)、グリーンング(阪急交通)、レジャー(富士海外旅行)、カメラリア(藤田トラベル)、エメラルド(はとバス)、ジョイフル(富士急トラベル)等々カラフルなパンフが各営業所に、ところ狭しと並んでいる。業者も十三年前に五十社であったのが、高度成長政策につれて現在は三百五十社にも急増している。そうした激しい競争の中で、女を買うのは男のかいしよみたいな男意識と、東南アジアの国々より少しばかり金持ちになった日本人の思いあがり意識が折り重なって、旅行業者の資本の論理に踊らされて買春観光が行なわれている。

大手業者は異口同音に「買春観光はやつていない」と言い切る。たしかに彼らは直接は手を汚していないであろう。しかし、現実に台湾で韓国でタイでフィリピンでインドネシアで、シンガポールで日本の買春観光客が群をなすという恥ずべき現実がある。「観光は平和へのパスポート」というが、そうした精神さえもふみにじられていく。JATA(日本旅行業協会)がいくら健全なる海外旅行をするよう業者を指導していても、現実には少しも変わらない。添乗員の八時間労働確保と、合理化によるコストダウンで各業者は、キャッチボール方式に切り換えて、責任を現地業者に転嫁しているだけである。こうして日本国内では買春観光の実態が見えなくされているのである。でも私達はごまかされないよう、これからの旅行業者の監視と告発、そし

て男たち女たちの意識変革を行なっていくかなければいけない。

追記

調査に行つた業者は、東急観光、日本交通公社、日本旅行、名鉄観光、日通航空、アジア旅行開発、以上七社。電話取材、東南アジアトラベルセンター、ほか小業者二社、資料の表は五十一年度観光白書による。

(調査者 湯浅れい、高橋喜久江、竹林孝枝、茂木英子、文責須田幸子)

1977年版 観光白書 日本人旅行者の比率・観光収入 (1975年の数字)

	外人観光客数	うち日本人の比率	観光収入 \$
香 港	1,300,836	29.4	525,000,000
シンガポール	1,324,312	9.0	259,900,000
タイ	1,180,075	12.5	224,100,000
フィリピン	502,211	38.3	155,200,000
台湾	853,140	49.1	
韓国	632,846	57.5	141,000,000
日本	811,672	—	
ハワイ	2,830,000	14.1	

「輸入」される女たち

安東美佐子

こんな山の中にも東南アジアの女性がいっぱい。五年ほど前の夏、北海道旅行の折のことである。層雲峡のホテルで見かけた見習いマツサジ師は、日本語も覚つた若い女性だった。韓国から来たという。

この数年、人件費の安い東南アジアから、女性を輸入して、ひと手間をたくらむ悪質な「人買い」が跡を断たない。民族の心と女の性を踏みにじって繁栄する日本の「夜の市場」の根強い需要があるからだ。その実態の一端を、国の発表した資料や、新聞・雑誌などに報道された事例から、追ってみた。

「観光」

女性を観光客として入国させ、バーやクラブで働かせて、売春を強いるという手口は、かなり以前から行なわれていたようだ。総理府売春対策審議会の「売春対策の最近の状況」(昭和四十九年)に、売春防止法違反で検挙した神奈川県が紹介されている。被害にあったのは、タイの女性五人。「草率的な風潮と海外ブームにより、外国女性のクラブホステスまたは売春婦がうけており、タイ国女性を低賃金で雇用できる」ことに目をつけたオーストラリアの経営者が、ひと手間を企てた。パノラマ市内で、商取引先の知人や、ホテルのボーイなどに紹介を頼み、タイの女性五人を言葉たくみに誘って、観光ビザで日本に連れてきた。

ことばも分からない彼女たちを、彼らは、「伊丹、神戸市内のアパートなどに分散、居住させ、高級クラブホステスとして働かせながら、管理売春をしていった」という。

この事件はやがて発覚。関係者十九人は、売春防止法違反で検挙された。女性たちについては、「被害婦女五名を救出保護した」と簡単に述べられているだけだが、おそらく心に傷を負ったまま、国に送り返されたのであろう。

「留学」

「トーキョーの夢は、タコヤ・バーに消え、ベ

トナムの乙女は、日本を去る。——アオザイを着たベトナム娘が、酔客にからまれて大粒の涙をこぼしているイラスト入り。社会面の軽いタッチのコラムだったが、紹介されている事実は、暗く、重かった(一九七五年二月二十四日付毎日新聞)。

「キミ、東京に行かないか。洋服店につとめながら、ファッションの勉強をするんだ。給料は一万バートン(約十五万円)」。服装メーカーの縫い子・Lさん(19)が、パノラマ市内で、日本の「紳士」から声をかけられたのは、その年の夏のこと。フランス人との混血で、ベトナム解放直前、母親とパノラマに移り、パリへ帰った父親を、さかしに行くことを夢みていた彼女は、友だちと二人で日本行きの飛行機にのった。十二月初め、羽田から迎える車で着いた先は、茨城県土浦市のアパート。古ぼけた編織を指さして、ママさんが言い渡した。「ボリスが来たなら、編織を習っているって言うんだよ。狭い、薄汚れたバーが、ファッション・スクール。日曜・祭日もなく、夜通しで働き、月給一万二千元。二十四時間監視つきで、泣くと平手打ちが飛び、翌日は食事をお預け。暮れも押しつまつて、Lさんは、出入国管理令違反の疑いで、東京入国管理事務所に収容された。冷たい鉄格子の中で、観光ビザで仕事をするにはできません。ただちに国外に退去しなさい」という退去強制令書を読む。——この記事からは、彼女を法違反に追いこんだ紳士たちが、どんな処分を受けたのかは、明らかでない。

「芸能」

「日韓要人出入の飲食店「秘苑」を手入れ。キーセンに酌などさせる」(一九七七年三月二十六日、毎日朝刊) 東京・文京区湯島の高級料亭「秘苑」が、風俗営業法違反の疑いで、家宅捜査を受けたのは、今年三月二十六日である。この店は、昭和四十七年ごろ「韓国料理」の看板でオープン。住宅地域にあって、風俗営業が許されない「飲食店」なのだが、

常時、芸能ビザ(芸能員)で呼びよせたキーセンを宴席にはべらせ、酌をさせるなどの接客行為をしていた。

実質上の経営者は、日韓ゆ着の黒幕として知られる元東声会会長、東亜相互企業(TSK)の町井久之氏。ロッキード事件の主役、児玉善士夫や小佐野賢治をはじめ、国会の韓国ロビイストたちが出入りしていたといわれ、一九七四年七月から七年三月までは、元法務省・横浜・入国管理事務所長の高木民司氏が代表取締役。昨年五月、参議院予算委員会が社会党が「秘苑」はKCIAのアジトという疑惑がある」と、法務省とKCIAの関係を追及したいきさつがある。

キーセンがどんな形でこの店に入ってくるかは一九七三年十月の決算委員会の、社・共両党の質問で明らかにされている。「民族舞踊の紹介等を目的とする芸能人」という名目で、常時七十人のキーセンが日本に入国。「秘苑」など六カ所の韓国料亭で働いていること。ビザの在留期間は二ヵ月だが、一回更新し、四ヵ月ずつ滞在、表向きは月三百ドル以内の手当なのに、一人平均二百万円もの金を持って帰ること。キーセンは、その時点までに、すでに十七回も交代していること。売春が行われているという「風評」があり、一九七二年の初めに無許可風俗営業として、警視庁が検挙、罰金刑に処した——等々。韓国から入国した女性たちは、ビザの形態を問わず、クラブ、キャバレー、料亭などの客席で接客行為をすることが禁じられていて、実態である。「秘苑」はことし七月はじめてから、親会社の東亜相互企業の倒産で、閉店されている。

「結婚」

毎年一回発行される「売春対策の最近の状況」(総理府)は、このところ、毎号、売春関係の犯罪が年々「多様化」「潜在化」「悪質・巧妙化」している」と指摘している。同じことが、東南アジアからの「人買い」の手口にもいえる。そのひとつも特徴的なのは、サンデー毎日「新・涙の連絡船」(一九七七年七月十七日号)が、「旅の人買い市場」——偽装結婚で日本のコリアン・クラブへ」と紹介した例である。登場人物は、埼玉県のアパートに住む韓国女性Kさん(35)。Kさんは日本に来る前、ソウルで子どもたちに歌や踊りを教える塾の

先生をしており、かつて結婚の経験もあった。一九七二年の十月、在日韓国人Rを通じて日本人技術者との再婚をすめられ、写真見合い、国際電話で承諾。その年の暮れ、夫となるM氏(29)がソウルにやってきて、結婚届を出した。Kさんは渡航手続きのできるのを待って日本へ渡ることになり、夫は二、三日で帰国。三月にもやってきたが、ビザが間に合わず、Kさんは結局七月になって、一人日本に渡った。

待っていたのは夫ではなく、紹介者のR。翌日から昼はRの家で家事手伝い、夜はチャ・チョゴリ姿で、Rが経営する「コリアン・クラブ」で働かされた。給料はなく、数万円の小遣いを渡されただけ。四ヵ月後、Rの家から夫のところへ逃げた。しかし、そこで数ヵ月後、引越に必要書類からと署名させられたのが離婚届。夫は町工場の工員で、二十万円で戸籍を貸しただけだった。Kさんは離婚無効訴訟をおこしたが、東京入管から「退去強制令書」を受け、七五年夏大村収容所送り。その後夫がRからもう一回戸籍を貸してと頼まれて、同じ組合で再婚。Kさんは東京地裁で「退去取消し」を求めて、法務大臣と東京入管所長を相手に争っているという。Kさんの夫の工員仲間のG氏(28)も、十八才の韓国少女呼寄せのため戸籍を貸し、韓国に渡ったとその記事に報告されている。

こうした偽装結婚の例は、韓国女性の場合だけに限らない。週刊現代は、「男と女の事件簿」(七七年四月)で、「台湾の愛人を部下の戸籍に入っていた呆れた病院長(50)の事件」とりあげた。台湾の花形ダンサーだったZ(22)と親しくなった東京・日野市の老人病院院長が、妻子と死別した部下の雑役夫・T(38)に、「台湾へ旅行して来い」と話を持ちかけて、団体旅行にいかせ、知らない間にZと彼の結婚手続きを完了。その後、彼女を日本に呼んで、妻子の住む家から遠くない場所に中華料理店を開かせた。院長とZとの間に生まれた女の子も、Tの長女として入籍する厚かましき。Tに再婚話が起り、戸籍上の複雑さがわかって破談になった時、院長は、「結婚祝い」と称してTに二十万円を差し出したという。ここでも、名目上の夫婦は、七六年十月協議離婚したことになる。事件はTの側から家裁に持ちこまれている。

この病院は、身寄りのない生活保護患者など、老人ばかり九十人前後が入院しており、以前は、群を抜く高収益で有名。さらに今年二月、不動産投資に失敗した院長が、約五億円の借金を残して「蒸発」。クスリは底をつき、病院の従業員等も大量に転職して「非常事態」となったため、都衛生局が立入り調査、再建指導に乗り出したことのあるいわくつきの病院である。院長という社会的な強者の身勝手な「重婚」のために、老人患者や雑役夫という「弱者」の人権が無視されたのだった。

(研修)

労働者受入れの技術研修生として、岐阜県下の縫製工場にやってきた韓国の娘さん二十八人が、研修どころか外出、面会も許されず、契約の半額にも満たない月一万三千円の低賃金で働かされていた。「研修生」からの投書をもとに、韓国の地方紙が「だまされ、日本へ売出される」「技術教えるはウソ。ただ酷使」と社会面トップで報道した(七二年十月七日、朝日)。非難された岐阜の業者は、従業員二十人程度の零細下請け七社。ブローカーの口車に乗って支度金百八分計千二百万円を渡したが、男は二十八人送り届けたところで姿を

源氏・浮世絵・ポルノ

富山妙子(画家)

平安朝の「源氏物語絵巻」から、江戸時代の「浮世絵」につづく世界は日本人の美意識をつくりあげてきた。

歌をよみ、月をめで、そのなかでくりひろげられる恋の哀歌——だがそれを一度はがしてみれば醜悪な現実が露呈するのだが、高度に美化した「ものの哀れ」でつみこみ、引目鉤鼻の美男美女の優美な世界をつくっていた。

宮廷と廊では階級はちがうが「源氏物語絵巻」の「美の嫡子」が(姫君ならぬおいらんの許へ通うわけだが)江戸時代の遊里で花ひらく浮世絵の世界であらう。

貧しさのため売られてきた女と、それを買う男たち——女の性が商品として取引され、女は前借で縛られ、病死をすれば俵につめられて投込み寺に捨てられ

消した。労働省は書類審査だけで認め、実情を知らなかった。

この当時から、今に至るまで続いているのは、看護研修生。各地の病員などで働きながら、看護婦資格を得る制度で、埼玉県毛呂山町の毛呂病院などに、韓国はじめ東南アジア各国の女性たちが実習中。しかし、日本の看護婦免状が通用しない国もあり、低賃金労働力の導入という日本側だけのメリットにとどまっていたケースが多いといわれる。そして近ごろは、「研修生」を名目に呼寄せられ、クラブやキャバレーのホステスとして働いている女性たちがいる、とも。

資料にあたっていくうちに、暗い気持ちに引き込まれていくのを、どうすることもできなかった。八月、東南アジア六カ国を歴訪した福田首相は、「カネとモノの外交」からの脱皮を掲げて、「心と心のふれ合い」を説いてまわったという。強者の論理で、民族の心と女の性を踏みしめるこの状況をそのままに、アジアの民衆の心に近づくことができるのだろうか。(新聞記者)

た……とリアルズムで描けばこうなる世界を浮世絵は美化した。

廊にきた女たちに「源氏名」がつけられ、田舎弁は廊の「ありんすことば」に変えられ「粋」と「通」の美意識で、女を買うことのうしろめたさを美化してしまふ。封建的身分制社会の桎梏の中に生きている男たちは「キャバレー」や「トルコ」にきてしばし現実を忘れストレス解消。

女を買うことが美と情緒で粉飾され、その性文化は資本にくりこまれてますます肥大して、「愛のコリーダ」ともなり、はては海外へ——性のショッピング、「キーセン観光」となってハレンチを播き散らす。「サムライとゲイシャ」がいつしか、「モーレッツ社員とキーセン観光」になっている。——この現実を日本の女が見すとしてよいものだろうか。

「社会常識」としての買春観光

週・月刊誌をみて

これは週刊誌、月刊誌が掲載した韓国、台湾、東南アジア買春観光に関するここ五年間の記事(29点)に目を通し、記事の傾向を調べた報告である。膨張する情報産業の中でも特に週刊誌は、買い手たる読者層だけにとどまらず、見出し、広告を新聞誌上や電車の中づりに氾濫させることによって、「社会常識」を形成・定着させる役割を努めあげている。マスコミの作り手であり、読み手である

男性の買春観光に関する意識と関心の持ちようが、記事の中にどのように表現されているだろうか。韓国・台湾・東南アジア観光に関する記事を掲載した週刊誌(週刊現代、週刊サンケイ、週刊読売、週刊小説、アサヒ芸能、週刊文春、週刊大衆、週刊新潮、女性セブン、プレイボーイの10点を調べた)の中で、買春に触れてないものはない。た、というより買春するためにこれらの国々への旅行(対象国は、韓国、台湾、香港、フィリピン、タイ、マレーシア、シンガポール)がある、という前提のうえに記事が書かれている。では、なぜ買春を目的として、日本の男性は韓国、台湾、東南アジアに向かうのか。

決して品不足ではないのに、女の値段がとみに急騰しているのは、ケシカランことではあるまいか。しかも品質不良——。こういう不逞の便乗組と枕をとにするより、いっその花のエロパックを大歓迎してくれる、デルタ地帯へ飛んで行きたいと思うのは人情であろう。悪しき日本よ、サラバ(アサヒ芸能・七二年三月三日号)。国内旅行なみの旅費で、日本女性には失われた、つましき、優しさが、片ことこの日本語を訓練された女

と遊べるのだから一度行ったら病みつきになり、「お客様のパスポートを拝見すると必ず韓国二回、台湾三回といったビザが捺されていますね(ベテラン・コンダクター談)だという。こうした記事の取り上げ方は、四つの型に分類できる。第一は、どの国で、いかに、いくらで買春できるのかを、享楽の体験談を交えて紹介するもの(「帰ってきた海外レジャー族の赤面行状記」「週刊サンケイ」)。ガイドブックに出ていない近い外国を楽しまするための特選情報——「宝石」(「熱烈抱擁」東南亜細亜「酒地肉林穴場」)。「週刊小説」と、この例をあげれば多くなる。第二は、目にあまる買春行動から引き起こされるトラブルを警告するもので、反日感情の増大を憂う国家威信のレベルから、又は個々人がどうすれば反感をもたれぬ遊び上手になれるかを教授するものがある(後者では、「ベッド・マッチはここまでが限度だ」)。「週刊大衆」前者では、「外務省が運輸省に物申したマニラ日本人観光客の狂態」——「週刊文春」。

第三は、旅行業者の利潤獲得のしくみ、旅行者の行状、現地ガイドのマジンスシステムを暴露する実態報告のもの(「妓生観光の実態」——「婦人公論」)。「週刊文春」女性セブン、「東南アジアへ精子を輸出する男たち」——「中央公論」。第四は、性病感染の危険から、いかに身を守るかをアドバイスするもの(「日本人の危ない台湾浮気旅行」——「週刊現代」)。

これらの記事には、書く角度に相違はおつても、快楽を得る道具として女性をみなす、買春行為そのものの疑いはなく、それは男性の本能である

という認識が一貫している様に思われた。

ただ、対外的な批判を意識させられる場にいる男性にあって憂慮されるのは、買春によって、反日感情が助長され、商売にさしきわがでてくる時である。元々外務省・アジア局長から運輸省観光部長あてに出された要望書(日比経済合同委員会、フィリピン側に指摘されたセックス目当ての団体客の行状は放置できない、内々に幹施する業者を早急にチェックすることが急務である、という内容)に対して、業者側の反応を載せる週刊誌によると(「東京観光」など経営陣は「旅の恥はかきすてという習性があり、遊び方だとして下手ですからね。根本的には国民のモラルになっちゃうんだ」「いくら取り締まりを厳重にしても全体的に観光客のマナーがレベル・アップしてくれないと防ぎようがないですね」と責任を転嫁すること実に堂々としている。そして運輸省では、添乗員の研修や、不健全な旅行を目的とした業者をチェックするために、通達を出しました」そうである。

つまり良識派の多数意見は、目にあまる行動を慎しめさせればよい、もっとマナーをわきまえた買春行為をするよう心してほしい、ということであるようだ。そうか、日本は、安き物をどんどん海外市場に求める、自由主義国家。女性を買い漁るのもこれまた自由とするのだろうか。

男性にのみ都合の良い社会通念を、無意識のうちに女性が支えてしまっているということがあるものだが、女性を対等の人間と見ることをしない、優越感の上にあぐらをかいた、この買春の常識を、まず私たち女が共有することを拒否すると、男性に告げてゆこう。

(安藤(初)・宇野・富沢)

人格軽視との闘い

キーセン観光問題にとりくんだ時、人々の反応は鈍く足は重い側面があった。たかが売春の問題ではないか、国内だって旅の恥はかき捨てである、男は本能的に浮気だ、という発想を前提にして立てば反応が鈍いのは無理もない。「あまた冷淡な反応か」と思いつつ韓国教会女性連合からのアピールを受けて行動を開始した私たちであった。私の属する矯風会が九十年前、発足早々に手掛けたのはからゆきさんの引揚げ問題である。「日本の経済力は貧しい娘の海外売春をなくしたが、代って日本男性の海外買春が登場したのか」というのがこの問題を知ったときの私の率直な感想である。

金大中事件を機に韓国問題の集会が多く開かれるようになったが、ある集会で男性発言者が「キーセン観光はたいした問題ではない。金大中事件こそ……」と述べたので、そのような男性意識がキーセン観光をほびこらせ女性の人権無視をもたらしてきたと抗議したこともある。「味方」であるべき人々にすら真の同志感をもちえないこの問題の難かしさを嘆きながら、少数の人々で手近にできることをともかくやり続けてきた。

日本男性が渡航者の男性率の高率

を誇示しながらなだれこむアジアの国々が、資本主義経済下の独裁政権国であることは、観光買春横行の原因がどこにあるかを示すものであろう。その状況をうみ出す構造を変革しなければ問題解決にはならない。あの男性発言者のいう「金大中事件の解決」が早道である。しかしそれだけではバイシユンという人間の性の本質に迫る問題の解決にはならないのがこの問題の難かしさなのだ。軍隊経験者にきいたことであるが、かつて軍隊では従軍慰安婦に接することを拒否した人間は奇人扱いに甘んじねばならなかったという。いま某大学運動部は親善試合で訪韓した全員が性病にかかって帰国している。三十余年を経た今日、社会状況は変わっても日本人の人間性の進歩はなく、人格は向上していない。性を人格的なものとしてとらえることの薄い日

人間として ゆるせない



本の社会風土、女性蔑視の風潮が、観光買春横行の真因ではないだろう。観光売春の余波はあちこちに噴出してきている。悪名高いキーセンハウス「秘苑」に來日したなじみのキーセンに夫をとられそうだと家庭悲劇に泣く妻、韓国婦の夫に性病をうつされ永年の信頼を裏切られた妻。行政当局の性病資料では感染源に「外国とくにアジアの国々での買春」が多くなっている。政治・経済の関係が密着し、最も近い国、韓国とはさまざまな交流があり、買春するため旅行する日本男性の集団に対し、観光、商用、留学、結婚の名目で来日する韓国女性の実質的に日本の売春産業下に組み入れられている状況がある。以前は日本の妻たちは夫の集団買春旅行のことを知らなかった。男た

中国・李樺作

怒ることから

「お金をちゃんと払って買っているのに、なにが悪いのか」という意識があつて、買春は正当な行為であるという考えは依然としてしている。女性差別を前提に社会が成り立ち差

ベトナム・ヴォー・ディン作



女として みすごせない

の女性観を変革するための状況を私たちは持たなかった。私はまず今、怒りを素直に表すことから始めたい。なんで買春観光なんかするの。あんなのか。(富沢由子・団体職員)

卑しい日本男性の見本

林与一という男は、女を人間と見ることのできない卑しい日本男性の見本のようだ。小川知子という女優との婚約をとりあげた週刊誌はどれもハンで押したように「二人とも過去の異性関係を告白し合った」ことがテーマ。何人の異性と愛し合おうとそれは自由だが、聞き捨てならぬのは林与一の女性についての発言だ。「過去の女性関係は、僕にとってそれほど重みはない。四、五年前までは結婚するつもりもなかったんだ。肉体的な遊びなら台湾へ行けばいいものね」私は色街で育って遊び始めたのは十四歳の頃から。女は

買うもんだと思つた(週刊ポスト)

同じ人間である女性を売買できるモノ、手段としか見ることでできない人間は、人間ではない。動物以下の卑しい存在だ。だから、恥じらい一つなく、あたりまえのことのように、こんなことが平気でいえるのである。妻にする女性だけは特別扱いしているようでいて、他の女性を侮辱している以上、愛というオブラートに包んで、少しばかり大事そうに扱っているに過ぎない。祝福されたカップルとは到底いえないだろう。

しかし、困ったことに、林与一だけが特別ひどい男性だというわけではないのだ。こんな男は、それこそ日本中にあふれているのである。彼らはまさに好色動物、セックスアニマルで、群をなして、韓国や台湾や東南アジアへ、女たちを辱しめに、買春旅行に出かけるのだ。

戦争中、日本軍が作りあげた残虐

日本を問いなおす

この数年来、巷に物があふれだし、街にはアメリカナイズされた流行の衣服を着た人々がさかんに歩くようになりまし。いつのまにか、自分もそんなことに慣れきつて、何も感じなくなつてゆくようになりまし。しかし、そういう日本の繁栄(??)それともかなり表面的なものだと思ひますが)も、東南アジアへ日本の経済力が進出し、現地の人々を労働力として使っている上に成り立っている、それによって自分も間接的にも利益を受けていると感じるにつけ、背筋の寒くなる思いがします。その上、儲けた金を持った多くの日本男性が、今度は東南アジアへ女性を買いに行っているという事実。

東南アジアへ目を向けるということは、とりもなおさず、こういう現在の日本の社会、経済、文化の在り方を問い直すことに通じてゆくと思ひます。

(安藤真紀・学生)

1977年6月15日

第3回 女大学

性侵略—この現実

マレーシア・ペナン「アジア女性フォーラム」に参加して

松井やより (新聞記者) 加地永都子 (アジア太平洋資料センター理事)



松井やよりさん

アジアの「苦悩と希望」

私と加地さん他日本から数名の女性がこのフォーラムに参加しましたが、あらかじめ「苦悩と希望」というパンフレットが配られていました。それには、金芝河の詩とか、広島の水を下さい」という詩とか、アジア各国のいい詩や文章が掲載されていて、今アジアの国々でどれだけ多くの人が苦しんでいるか、そして闘って獄中にあるかを知ることができると、パンフレットでした。これを見て、この会議がアジアの女性たちの問題を真剣に討議するのだという方向がわかりました。

五月二五日から五日間のフォーラムは、次の分科会に分かれて話していました。

- ① 教会と女性
 - ② 女性と男性—女性差別の問題
 - ③ 抑圧の制度
 - ④ アジアの経済、社会的現実
- 私は第四分科会のリーダーを引受けて種々の決議や勧告を作ったわけですが、マレーシアのペナンというところは、マレー半島のマラッカ海峡側にある小さな島で、イギリスの植民地だった

たのですが、まだ遠くから見れば海も青く、緑の多いとてもきれいな島です。この島に、アジアの十四カ国から女性約百人が集まりました。参加者はそれぞれ何かの形で運動をしているとか、教会の中で社会的問題に関わっている人達です。ところがまず驚いたことに、マレーシアに入国する時もパスポートを見せると、危険人物でないかどうか、いちいちブラックリストのようなものと照合するという、非常に厳しい政治の雰囲気を感じましたが、フォーラムが始まってみると、参加する予定でいて参加できなかった人達がたくさんいるわけですね。朴独裁政権下の韓国などからはほとんどの人が参加できず、フィリピンでも、マルコス戒厳令下で活動的な人は参加できなかったという状況です。

厳しい各国の政治状況

今回のテーマである性侵略というものを考える背景として、まず、アジアの国々は非常に厳しい政治的状況に置かれているということを身に沁みて感じたわけですが、例えば今度の会が開かれたマレーシアでも、国内治安法という法律があって、政府に対して少しでも批判的動きをした人は何らかの裁判を受けることもなく拘禁されたりできるようになっていて、

私がクアラルンプールで会った「ストレイツ・タイムズ」という英字新聞の記者も「編集局長が獄中にいる」といつていました。またマレーシアから参加したフォーラムの女性は、何か発言しても「マレーシアという国名を出さないで欲しい、そのため多くの人がどんなきびしい尋問を受けるかわからないから」と訴えていました。フィリピンでは戒厳令下にありますが、政治犯が大勢います。クーデターで、政治犯が大勢います。そのことについて参加者はたまたま一言も言えないほどの状況です。たまたま耳にしたのですが、インドネシアでは家族計画、産児制限のことで七千人もの人を集めて講習会をやったそうですが、それを主催したのはなんと治安当局で、そういう場を利用して、共産主義者を草の根を分けても探し出そうという厳しい状況です。こういう中で今度の会議が開かれたということが、非常に強烈な印象でした。

たとえばフィリピンの女性政治犯の釈放を訴える決議をしようと参加者は準備していましたがそれすら結局できなかったのです。

それで私達日本からは、『しばらくの手折り』や、川崎製鉄の公害輸出のスライドを持って行ったりしましたが、何と言っても、日本は他

で、性侵略という言葉が自然にできてきたわけです。

経済侵略と表裏一体

性侵略の本質というのは、第一に、経済侵略と表裏一体をなして不可分に結びついているということです。一九五六年に日韓条約が結ばれて以後、日本が韓国に対して経済的侵略を進めて行ったわけですが、それと並行して観光客が押し寄せて韓国の女性たちを性の奴隷にし、「我が祖国を日本男性のための遊廓とするのか、赤線地帯とするのか」と韓国の女性を嘆かせたわけです。

さて性侵略ですが、この言葉は数年前から、私達が作ったと言っていると思います。

これは、一九七〇年代に入って日本の男性が韓国のキーセンと呼ばれる女性と遊ぶことを目的に観光客として押し寄せ始めたということが発端です。七一年に八万人、七二年には一八万人、七三年にはなんと五十万人もの日本男性が韓国を訪れた。それについて韓国のクリスチャン女性たちが「日本男性が来て同胞の女性を性の奴隷としていることを憂慮する」という訴えをしたわけですが、そのアピールをした李愚貞さんは民主救国宣言事件で有罪となっており、何かやらねばならないと思ひ、キーセン観光の問題をとり上げてゆく中

第二に、歴史の繰り返しであるということ。戦争中に日本軍が朝鮮の若い女性を何万人も従軍慰安婦として狩り出して、戦場へ連れて行って性の奴隷としていたという恥ずべき歴史的事実があります。軍事侵略と結びついていたのですが、今度は経済侵略と一体となって繰り返されているのではないかと、性侵略という象徴的な言葉が出てきたのです。

第三の特徴として、独裁政権下の国が性侵略を受けられているということ。キーセン観光は韓国の場合ですが、その前には台湾の北投温泉が、日本男性の買春観光のメッカになっていました。ところが、日中国交回

復で台湾との関係が後退したために、台湾への買春観光が、ドツと韓国へ移ったわけですが、そういう歴史的なきさつがあるのですが、最近の新聞の小さな記事に、台湾政府の観光局が嘆いている。日本は観光客数として第一位だが、その九〇%以上が男性だ、もっと女性に来てほしいのに残念だといっていることとありました。他の国からの観光客は、たとえばアメリカは女性が四割で、日本のような国はないということです。このように観光客の中の男性の割合、つまり男性率というものが、象徴的に多くを語っていると思います。日本人が海外旅行する場合に男性率が一番高いのは韓国の場合で九四・三%。第二位は台湾の九三・一%、次にフィリピンの八四・三%、タイの八一・七%、インドネシア七八・五%という順で、この数字からも韓国、台湾から、各国に買春観光が非常に広がっていることがわかります。

国が女たちを売る

フィリピンの女性から聞いた話ですが、マニラの土産物屋の店先で日本人男性が売子の女性に誘いかけ、さわたりしている。ところが、その女性は店の主人から、そうすれば日本人男性が土産を買ってくれるからサービスするようにと日頃言われ

ているらしく、とてもつらい表情をしながら我慢しているというのです。日本人男性は道を歩いても女と見れば誰にでも「今夜遊ばないか」などと誘いかけ、マニラの子供たちは日本の男性に会うと「キレイナオンナ」と日本語で言ったりするそうです。それだけ、日本の男性は女性を目あてに来ているということが、一般市民にまで知れ渡っているという状況です。

こういう女性をフィリピンでは、「ホスピタリティ・ガール」という名称で呼んでいて、講習などを受けさせて国家が外貨獲得という経済的な目的のために体を売らせている。つまり彼女達はフィリピンの国家に貢献していると高官などが言っているわけですが、これはキーセンについての韓国高官の言い草と全く同じです。

タイの場合はこういう女性を「マッサージ・ガール」というのですが、タイの外貨収入は第一位が米の輸出、第二位が錫の輸出、第三位が観光収入です。つまりタイの女性たちをマッサージガールとして外国人に提供するという形で外貨収入を得ているわけですが、まさにこの国でも国家が経済のために女性の体を利用しているのです。ペナンでのフォーラム会場にも、「私たちの体は売り物ではない」というポスターがはってありましたが、外貨収入のためにアジアの

各国で女性たちが売春観光の道具にされているという実態はここまで来ているのです。タイのバンコクにはトルコ風呂がたくさんできていて、日本の男性のセックス・スキャンダルが、タイ中に知れわたっているという状況です。

日本の女は娼婦か奴隷か

その他、インドネシア、マレーシアでも、基本的構造は同じなのですが、単に観光客として来るのみならず、ビジネスマンとして駐在している日本人男性についても同様の実態があります。「商社員などなぜ奥さんを連れて来ないのか」とアジアの女性からしばしば聞かれましたが、ベナンにも日本の工場がぞくぞくとたっていますが、そこに来ているビジネスマンなども「女房連れでくるより現地の女性と適当に遊んだ方が自由でいい」などと現実には言っているわけです。

インドネシアから参加したある女性には、たまたま二階を日本の商社員に貸しているそうで、女性を連れて来ないことを条件としたのに夜毎に連れて来る。しかも毎日朝の三時四時まで遊びほうけているし、近所で奥さんを連れて来ている日本人もよく夜遊びに出かけるが、それを奥さんがどうぞと送り出している、「なぜ

日本の女性は夫が女遊びするのを公認するのですか」というのです。

性侵略の本質として先に三つの点を挙げましたが、ここで第四の点として、日本の女性のあり方、夫と妻のあり方という問題が、非常に深く関わっているのではないかとこのことを感じたわけです。日本では、女性がまだまだ人間として認められた存在ではないということ、つまり、女は家内奴隷か娼婦かどちらかだというような侮蔑した女性観がまだま

公害輸出する日本企業

ところで、ベナンで東レなど日本企業の工場団地を見学したのですが、ものすごい量の排水を海にタレ流しているのです。高潮の時には水門を閉め、潮がひいたら水門を開けて、吐き気するような悪臭のドロドロした排水を出しているのです。

こうして日本の工場が流した排水のために、今まで魚を採っていた近くの漁村の生活が、惨たんたる有様になっているということが既に起こ

っているわけです。公害輸出でアジアの国の人々に苦しい思いをさせているということが現に起こっているわけです。

村に行ってもう一つ驚いたことは、日本軍が、戦争中この村に入つて人を殺しているのです。それも、何十メートルもあるヤシの木に登らせて追いつめ、その木を根本で切り倒して、木の上から落ちて死ぬというような、非常に残酷な殺し方をしているんです。マレーシアでは日本軍が各地でたくさんの人を殺していて、今も殉難の碑があちこちに建っているのですが、その横にソニーだのサントリーだの日本企業の看板が立ち並んでいる状況で、昔日本軍に踏み

にじられて今、日本企業に踏みにじられていると言ったジャーナリストの言葉が身にしました。まさにこういう実態にこそ、私達をもっと監視の目を向けていかなければいけないと感じるのです。

このように日本の性侵略の背景である経済侵略が非常に勢いで広がっているという実態は行ってみて実感として解ったのですが、政治犯の問題を公式に決議することさえできない状況にあるほかのアジアの国の女性達は、怒りの声をあげることもゆるされない。反政府活動とみなされるからです。日本はアピールできる状況にあるのだから、売春観光の問

日本女性の役割

実をいうと、アジア各国の女性たちが苦しい中で地道に活動していて、決してあきらめていないということに強く打たれました。フェータリズム（宿命論）といって、運命としてあきらめてしまうということが宗教の影響もあって根強い。つまりあまりの貧しさ、苦しさのために、こういう気持ちに陥っている民衆も多いわけですが、その中で自分たちは人間として人間らしく生きてゆくために戦うのだと、インドやスリランカで農村に入つて草の根の運動を地道にやっている女性たちも少なくない。そういう女性がフォーラムに来ていましたが、本当に頭が下がりました。韓国の女性たちの闘争を見ても非常に励まされます。

一番感じたのは、日本がアジアの女性達に迷惑をかけているという実態をまず知って、問題提起してゆかねばならないし、そういう人達の訴えを、国際世論にしてゆく役割をもっと果たさなければいけないということです。そして苦しい中で戦っている人たちの戦いの様子を知って、非



加地永都子さん

「怒り」こそ闘いの原点

アジア女性フォーラムの席上、フィリピンから来たカトリックのシスターが、こう発言しました。

「今苦しんでいる人たちが欲しているのはあなた方のあわれみでもなければ、嘆きでも、涙でもない。ましてや祈りでもない。怒りなのだ。」

この人は、フィリピンにおける女性の政治犯の問題を会議全体を通じて訴え、それが非常に皆の心に残ったのですが、同時に、その人の抱えて立っている姿勢が、私達を打ちました。そしてその「怒り」というものを、日本人としてどこまで共有できるか、日本人は果して怒れるのか、ということを私は強く感じたわけ

です。

そのフィリピンのシスターが訴えたのは、トリニダット・ヘレラ夫人という人についてです。この人が警察につかまって、乳房や親指、果て

は女性性器にまで、電気ショックによる拷問を与えられたというニュースが、丁度会議の寸前に伝わりまし

た。この人のことを、アジアの女性政治犯のシンボルとして支援することを国際的に拡げたいという訴えがフィリピンの代表から出されたわけです。

この問題を最初に出された時、あつてはならないことだ、許されざることだという気持は当然あつたわけですが、一方で、あまたかという感じが正直なところありました。ところが、この人がどういう人かを知ってゆくうちに日本人である私にとって、これは、またかですまされる問題ではなくなってきたのです。

闘うトンドの人々

マニラにトンドというアジア最大のスラム街があります。普通の観光客には見えにくくなつていてマニラは特に昨年の九月にIMFと世界銀行の会議が開かれた際に、大統領夫人でありマニラ市の知事であるイメルダ・マルコスの命令一下、目撃き通りは非常にきれいになっています。それでもハイウェイを行けば、いやでも応でもトンドにぶつかる。それがマニラの現実です。そのトンドに住む人達は、ZOTOという住民組織を作っています。この一種の住民

の自治組織のリーダーがヘレラです。この人達は確かに貧しいし、清潔でもないけれども、そういういわゆるスラム街のイメージでトンドを見るのは間違いです。トンドの人達は貧しいけれど非常に強い人達なのです。この人達は貧しさに絶対に打ちひしがれていません。というのは、トンドは戦前からあるのです。スラム街のことを、英語でスクッターズエリア即ち不法占拠者の住んでいる地域というのですが、どこからか流れて来て、不法に住みついた人達のいるところがスラム街だということです。

しかしこの人達は住みついても三十年以上経つわけで、こうなるとうう、不法であるとかないとかという問題でなく、完全にその住民なわけです。ところが貧しいというだけで、トンドの出身だというだけで非常に差別されている。そのために、私達も人間なのだ立ち上がって組織を作ったのがZOTOなのです。

マニラ湾に沿ってトンド地区の隣りに巨大なゴミ処理場があり、その隣りにナボタスと呼ばれるやはり貧しい人達の住んでいる地区があります。これら全体を含めての海岸一帯を対象に、七四年からマルコス政権は、トンド地区都市再開発計画という巨大なプロジェクトを作ったわけですが、これに完全に乗っかっているのが日本なのです。

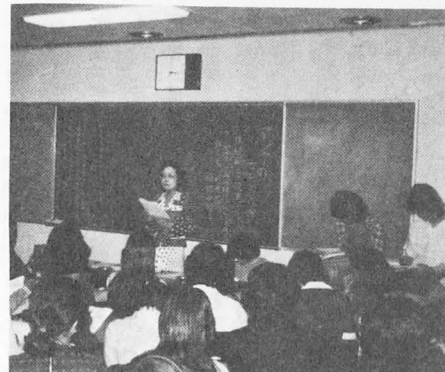
題にしても人権抑圧にしても、もっと積極的な抗議して国際世論作りをすることは、私たちの大きな責任だと思っています。

資金的にも、企業の間でも、日本

がまさにマルコス政権と一緒になつて再開発計画を進めているわけです。大きなプロジェクトが四つほどあつて、一つが先日オープンしたフィッシュポート（漁港）です。その次に計画されているのが、大型の日本船が入るような大規模な国際港です。その次はマニラ湾沿いに完全な埋め立て地になつていて、通称マルコスシティと呼ばれている完全な観光客用の歓楽地。四番目がスラム街の人々の住居——ダガットダガン計画という団地計画です。

そうやって三十年来住みついている何万人の人々を一掃してしまおうという計画をたてたわけです。お題目としては、スーパープортもできれば、機械化された近代的な所で労働者として雇うし、新しい団地にも住まわせるといふことだけれど、これに敢然と抵抗しているのかZOTOの人々なのです。

ナボタスの人達もとても反対しています。何故なら、このプロジェクトのために仕事を失い、何らかの形で追い出される人が何と二十万人もいるからです。一番生存の危機にさらされているのがナボタスの人々です。新しい漁港ができたために古い形の仕事や住み家を追われるということで、絶対にどこかへと頑張っています。



熱気あふれる「女大学」風景

ソ連と同じ日本の漁業

フィリピンも島国ですから魚をよく食べます。その中で、日本がこういう再開計画に肩入れしている最大の理由は何かというと、やっぱり魚なのです。二百カイリ以来、ソ連けしからんという記事は新聞で毎日見られるけれど、日本の船がどんどん出かけて行って、フィリピンの周辺の魚をじゃんじゃん捕ったりしているというところは、一切私達には知らされていません。ソ連が魚を捕らせてくれないのはけしからんけれど、日本がフィリピンの内海まで入って行ってすきなだけ魚を捕ってもよろしいということについては、おかしいとは新聞は書かない。日本の船は今、フィリピンのどこであろうと自由に出入りすることができず。

なぜそんなことが可能かというと、フィリピンとの間に日比通商友好航海条約という条約が結ばれているからです。この条約は、フィリピンの人々にとつてあまりに不平等な条約だったから、五七年の締結以来、フィリピン議会は十年以上、批准を許しませんでした。この条約を効かせたためにマルコスは一九七二年九月、戒厳令発令という強硬手段をとらねばならなかったのです。そのことが、やはり私達に完全に見えなくされている。そしてソ連けしからのキャンペーンばかりが目に入ってくる。そのことを私達がどうひっくり返してゆかかということ、一番大事なことです。だから私はヘレラがここで頑張っている、私達はここの住民で、不当に追いつめられるのは御免だと言つてつかまつて拷問されたということが、私達の問題なんだと考えると思うのです。ただしこの辺の回路というのは、このように実にいくくんできて、いつも目に見えにくくされているから、その辺のところをぬきにして、ヘレラという人が牢屋に入つて電気拷問されて、ああ気の毒だという話で終わる。それで終わらない、そう感じているわけです。

頻発する日本企業の労災

具体的にフィリピンの例で言つた

けれどもこういうことはアジア各国との関係について同じようなことが言えるわけで、例えば、シンガポールでも、私が去年会った女の医者が、日本の企業での労災が非常に頻発していて、それが闇から闇へ葬り去られているということとても心を痛めていました。彼女は工業団地の中へ入つて実態調査をしたりしていましたが、今度のフォーラムの機会に訪ねた時、もう彼女はいませんでした。そうした調査をすることすらできなくなつて、イギリスへ亡命したのです。そういう厳しい状況の中でアジアの女性が言う、今必要とされている「怒り」というものを、どこまで私達が本気で共有できるかというところは是非一緒に考えてみたいと思います。

「怒り」を共有するには……

アジア太平洋資料センターのやっている学校で、先般、プロレタリアートという言葉が出てきたのですが、それは無産階級と訳されているけれども、今の日本の社会の中には、有産の労働者階級というものがあるのではないかと議論になった。何故なら、日本とアジアの関係を考えたならば、いかに低賃金の日本労働者といえども、アジアの労働者のあがりを見て生きているのだという

こと、その関係をつかみ直さないとただ抽象概念で労働者階級と書いても駄目なんじゃないかということとをある人がいいました。そういうあがりを見て生きている我々ということから、日本人としてどうするかというと、例えば魚でいえば、フィリピンの人達にとつてみれば、日本の船が魚を捕っているイロイロとかカビテとかは有名だけれど、フィリピンでの漁獲量がいくら増えても、フィリピンの人達の口には入らない。冷凍にして日本へ持って帰つて罐詰になつてそれをフィリピンの人達が逆輸入して高い罐詰を買わされるという矛盾、その罐詰を売ったあがりを見て食べているという、そういうことをどこかで断ち切らなくては行けない。そのためには、私達の食いぶちくらいは、ある程度日本の中でまかなわなくては行けない、そんなにキラキラしたものは着なくてもよいという一種の意識の革命、転換みたいなものをどこかでしないといけない。そうでないと、日本人というのは、セックスアニマルでエコノミックアニマルでいやなやつだと言われっぱなしで、いつか「怒り」というものを全く共有できないまま駄目になってしまうのではないかという思いがするのです。

(加地永都子)

タイのタニン首相に要望書提出!!

九月七日、タニン・タイ首相来日に関し、私たちは「アジアの女たちの会」は次のような要望書を手渡しました。次に掲げる文章は要望書の一部です。

私たちは、さらに女性として「売春は民主主義のシンボルである」「自由主義を愛する者は売春を愛する者だ」といった、あなたの発言に満腔の怒りを禁じえません。これは女性の人権をあまりに

も無視するものです。国策として観光売春を奨励しているタイ政府の姿勢に私たちは「アジアの女たちの会」会員は、強く強く抗議するものであります。そのような政策を利用して、多数の日本男性たちが観光客として貴国を訪れ、貴国の女性たちの人間としての尊厳を踏みにじっていることに、日本の女性として憤激を禁じえません。タイの人を愛し、タイの美しい自然を愛する私たちは、

その故に今回あなたの来日目的に賛意を表明することができません。日本政府の「経済援助」は日本企業の進出による自然破壊、公害を招き、結局は更なるタイ民衆への弾圧を強化するだけではないかと恐れます。

以上の理由により、私たちはあなたに次のことを強く訴え、望むものであります。

☆NSCTスタム書記長をはじめとする全ての政治犯を即時、釈放せよ!

☆オリサー君に医師団の派遣を!

☆政治犯の調査団を受入れよ!

☆言語・出版・集会・表現の自由、政治活動の自由をただちに回復せよ!

☆全ての人権抑圧、就中、女性たちに対する人権抑圧を即時やめよ!

一九七七年九月七日

資料紹介 買春観光を知るために

題名	作者・訳者	出版社
性侵略を告発する	キーセン観光に反対する女たちの会	
キーセン観光を告発する	高橋喜久江	「世界」1974年5月
私はなぜキーセン観光に反対するか	松井やより	未来社「女性解放とは何か」
キーセン観光反対の歩み	山口 明子	「新日本文学」1976年3月
妓生観光の実態	伊達俊太郎	「婦人公論」1974年2月号
東南アジアへ精子を輸出する男たち	山本 幸子	「中央公論」1977年5月号
日本の性侵略を恥じる	高橋喜久江	「統一評論」1977年8月号
☆ ☆ ☆ ☆ ☆		
従軍慰安婦 正・統	千田 夏光	双葉社
天皇の軍隊と朝鮮人慰安婦	金 一 勉	三一書房
朝鮮人慰安婦と日本人	吉田 清治	新人物往来社
女子挺身隊	朴 鍾 国	「アジア公論」1974年2月号
☆ ☆ ☆ ☆ ☆		
売 春	神 崎 清	現代史出版会
国家売春命令物語	小林・村瀬	雄山閣
売春の社会学	マン シ ニ	白水社クセジュ文庫
人身売買	牧 英 正	岩波新書
売春と前借金	日本弁護士連合会	高千穂書房
娼婦(近代民衆の記録)	谷川健一編	新人物往来社
娼婦海外流浪記	宮岡 謙二	三一書房
サンダカン八番娼館	山崎 朋子	筑摩書房
サンダカンの墓	山崎 朋子	文芸春秋社
からゆきさん	森崎 和江	朝日新聞社
明治女性史第四巻	村上 信彦	講談社文庫

現代評論社

東京都中央区京橋3-11番地

アンジェラ・デービス
自伝(上、下)

加地永都子 訳

(上) 一三〇〇円 (下) 一二〇〇円

四六判上製

アメリカの黒人解放闘争が熾烈な火花を散らしていた一九六五年から七一年、アンジェラ・デービスは黒人政治犯のために闘い、UCLAの教職を追われながらも、黒人革命家としての使命を獲得してゆく。誘拐、殺人の容疑をかけられ一九七〇年一月、アンジェラは長い逃亡の後逮捕されたが、人種差別体制を打ち破る被差別人民の闘いによって、一九七一年六月、無罪を勝ち取った。本書は、獄中闘争の過程で、黒人・有色人種の闘いと、共産主義に自覚する自己の歩みを語る自伝。

活動報告

- 3・1 「アジアと女性解放」創刊よびかけ
のアピール・発行
準備会・渋谷勤労福祉会館
- 4・20 第1回 女大学
〈アジアとの出会い方〉
講師 鶴見良行
学習会 〈インドネシア報告〉
報告者 内海愛子
- 5・9 第2回 女大学
〈経済侵略と女性〉
講師 北沢洋子
学習会 〈キーセン観光の状況〉
報告者 高橋喜久江
- 5・18 第3回 女大学
〈性侵略——この現実〉
—ベナン集会からの報告—
報告者 松井より・加地永都子・
高里鈴代・カーター 愛子
- 6・6 機関誌『アジアと女性解放』創刊号
発行
東山君虐殺抗議・三里塚東京集会
——日比谷集会参加——
- 6・15 学習会 〈バンコックから帰って〉
報告者 猪狩章
機関誌合評会 於・早稲田奉仕園
- 6・19 第4回 女大学
〈在日アジア人女性との対話〉
ベトナム・マレーシア・在日韓国人
の女性たちと
- 7・13 東南アジアの人権と日本——八月行
動委員会参加
アジアの政治犯即時釈放行動・ASEAN
諸国大使館ヘデモ
- 7・20 合宿にて報告と討論
於・西湖民宿村
- 8・5 〈しばられた手の折り〉上映会
於・渋谷勤労福祉会館
- 8・6 学習会 〈福田首相の東南アジア訪問
をどうとらえるか〉
報告者 武藤一羊
- 8・27~29 〈しばられた手の折り〉上映
於・小金井福祉会館
- 9・13 経済侵略グループ〈タイの繊維工場〉
報告者 小本和孝
- 9・19 〈しばられた手の折り〉上映
於・八丁堀勤労福祉会館
- 10・5

合宿報告



合宿の女たち（自己紹介風景）

異例の長雨がようやく上がり始めた八月二七日から二九日までの三日間、富士五湖の一つ西湖民宿村で、アジアの女たちの会の合宿が開かれました。この会にとつては初めての合宿。日頃意見交換をする機会の少なかった広範な地域の女性たちとの親睦を兼ね、関東、関西を中心に四十九人プラス三人（子ども）の会員が参加。交通至便とはいえない難い富士山麓でしたが、予想を上まわる参加者を得て二軒の民宿を占領する結果となりました。

「私がたぶん最年少よ」となぜか嬉しそうに言う学生たちから、「私がひよっとしたら最年少よ」と、これもなぜか遠慮がちに告白する幾多の運動経験者まで、詩人、教員、看護婦、公務員、無職浪人、家事専業と、職種や立場もさまざまなら、アジアに「触れる動機や知識もさまざま。初対面ながらも、自己紹介からしてすでに予定時間をオーバーし、一日目の最後のプログラムである「しばられた手の折り」の上映を終えたのは実に午前一時過ぎ。短時間にどうしても欲張りぎみのプログラムを組んでしまうので、二日目の学習も、報告者は時計とにらめっこしながら大胆に持ち時間をオーバーし、聞く側も、ああ、もっと知りたい、考えたいと心残りのまま制限時間を迎えたのでした。

合宿に参加して

「タイの女性はどう関わってきたか」を農村での運動と都市労働者の運動とをとりあげて、伝統や制度的な背景を含めて解説した報告（桜井恵子氏）。中国の女性史を「儒教的抑圧からの解放」という視点でまとめ、革命前、革命後の中国女性の歩みを比較した報告（松井より氏）。インドネシアの豊富な資源をめぐる日本の思わく、それと日本とはあまりにも対照的で一面前近代的とも思えるインドネシア女性についての興味深い報告（内海愛子氏）。その他、フィリピンやインドシナ半島の国々が、列強の植民地支配下のもとでたどってきた近代化の過程、韓国女性史など、加地永都子、五島昌子、富沢由子、山口明子の各氏の報告がありました。質疑応答は、「それでは私はどうかかわればいいのかしら」という討議に変わり、これから会としてやっていくこと、個人としてやることを確認し合ううちに、さっそくタイのタニン首相に手渡す要望書を作成

する有志が生まれたり、「アジアと女性解放」の英語版担当を引受ける人が名乗りをあげたりしました。合宿がこのように具体的な活動への一つのバネとなることを知って、私たち会員は、今後運動を進めるに当たって、お互いに心強い感想を抱きました。アジアに出会うためにここで出会った女たちのすばらしさを思うにつけ、諸事情により参加できなかった人々にはぜひ来年の参加をお勧めします。（文責・竹林孝枝）

白田ひろ子（厚木市・教員）

いい女たちに、しかも50人もの女たちにめぐり会えたことが最もうれしかった。これだけ真剣な、やさしく、弱く、強い女たちが世の中にいたのだもの、人生捨てたものじゃないな……。

20代も、30代も、40代も50代も、すべての女たちが熱意にあふれて集まったこういう会にはじめてです。自立し、成熟した女とは30才もすぎからなんです。20代とはまだ、それも前半とはガキのうち、修業の身でいいんだと思っているのですが……。しかし、韓国で、タイで……10代の女たちが最前線で闘っているんです……。

「私たちの宣言」をはじめあまりに重いことで、私としてはどうするか、合宿から帰って来て寝込んでしまいました。まず、アジアを知りたいです。平和・革命・愛を願いつつ。

H・カタリノ（リスボン）

「女性国際ネットワーク」は一九七五年に創立された国境・人種・年齢を超えた全世界の女性のための女性の手になる開かれたコミュニケーション・システムです。活動情報・機関誌をお送りください。我々の機関誌「WINニュース」をお送りします。F・P・ホスケン（編集長）

機関誌を読んで、あなたがやっておられることは非常に大事なことでと思います。成功を祈ります。どんな情報でも結構ですからお送り下さい。とくに、性侵略の詳細について発表されたとき、どのような反響があったかなど知りたいと思います。

フリーダ・ウォルソン（イギリス・マンチェスター市）

（訳責・三宅政子）

雑誌 アジアの胎動

第3号発売中 定価430円

- 座談会 我々にとってASEANとは何か！
出席 B・ヌハムティン（マレーシア）
S・ミブン（タイ）A・ル（インドネシア）
K・ラマン（フィリピン）
- マレーシアにおける民族問題ヌハムティン
○リサールをのりこえるためにコンスタンティーノ
○ある朝鮮プロレタリアの半生 金相泰
○何が留学生たちを貝にしたか！ 外山宏次
○インドネシアに暮して 内海愛子
○儒教思想と婦人解放 古島琴子
○韓日大陸だ協定の本質を衝く キム・サンウ
○小説決断の時（タイ）○民話勇敢なアダル（中国）

発行 たいどう出版 東京都豊島区西池袋4-36-15サトウハチ

アリラン峠の女高峻石

—ある朝鮮女性革命家の回想—
戦前—戦後と民族解放運動の同志であり戦いなかばで李承晩に虐殺された妻金師任の半生を夫の立場で綴る回想記
定価一、一〇〇円223頁

風の慟 哭金賛汀

—在日朝鮮人女工の生活と歴史—
定価一、三〇〇円237頁

田畑書店

東京都港区赤坂4の8の19

赤坂表町ビル

TEL 〇三（四〇三）五八・九

アジアと女性解放
第2期9月～12月

9月27日(火) 第三世界の構造
講師 西川 潤氏(早大助教授)

10月19日(水) 解放の美学
講師 富山妙子氏(画家)
高橋悠治氏(ピアニスト)

11月16日(水) アジアの近代化と女性の地位
ータイを中心としてー
研究報告 湧井由美子氏・大塚仁子氏

12月14日(水) アジアの国々に暮らして
インド・スリランカ・ビルマ・インドネシアから

*時 間 午後6時30分
*会 場 渋谷勤労福祉会館(パルコ前)
*参加費 300円
*問合せ先 (03) 508-7070(昼間のみ)

アジアの女たちの会 テーマ別グループ

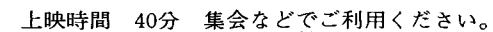
各グループが資料集め、研究、調査、活動、あるいは価値観の変革などを目的とします。

- * 性侵略.....山口 明子
買春観光についての資料を集め、買春抗議
集会を計画中
- * 経済侵略.....松井やより
繊維産業を中心に、日本の女工哀史から海
外進出を追跡調査、月2 回例会
- * 人権・政治犯.....加地永都子
韓国政治犯に毛布1 枚カンパキ ャンペーン
- * インドネシア.....内海 愛子
『東南アジアの歴史』 永積 昭 (講談社 現
代新書)を読むことから始める 月1 回例会
- * 国籍法改正.....安江 とも子
国際結婚の具体的なケースを集める
- * 資料収集.....富沢 由子
戦前のアジア主義の文献を収集検討
月1 回例会
- * 解放の美学.....富山 妙子
第三世界と女性の目から見なおす芸術
月1 回例会

ご希望のグループに参加ください。

幻燈作品
火種プロ製作

金芝河の詩を主題として
絵と音楽による
連帯のメッセージ



★販価 スライド・テープ付 20,000円
★貸出し料 8,000円

制作スタッフ／原作・金芝河／訳・鄭敬謨／企画

子／作曲・朴炯圭・林光／バイオリン黒沼ユリ子／ピアノ林光・
高橋悠治／歌・鄭敬謨／詩朗読・伊藤惣一／ナレーター林洋子／
撮影・本橋成一・江西浩一／構成・土本典昭・小池征人・前田勝
弘

《火種プロダクション》・〒171 東京都豊島区池袋3-1555富山方
《ふいごの会》上映の申込先・TEL9時～4時迄0422(44)5883 篠塚方

— 韓国政治犯に毛布1枚キャンペーン —

韓国では、今もおお多量の労働者や学生が獄につながれ厳しい冬を迎えようとしています。1人でも多く獄中で闘っている人に毛布1枚をカンパしたいと思います。多くの人々によびかけてご協力下さいませ。なんらかで1口でもかまいません。またピラも用意してあります。ご希望の方は五島まで連絡を

1 口 毛布1枚 3千円
目 標 2百人分 60万円
切 1977年12月10日

送金方法 郵便振替でお願いします。
振替番号 東京0-46143

アジアの女たちの会へ
(通信欄に「毛布のために」と明記の事

追記：集まったお金は、韓国の政治犯の家族で構成されている救援組織を通して、確実に渡されます。

アジアの女たちの会
横浜市保土ヶ谷区桜丘112県住公社147 5島力
電話 東京03(508)7070(昼間のみ)

あなたもぜひ会員に!!
友人もさそって!!

会 費 年間千円（但し、会をささえるために1
1口千円の維持会員をつのります。）
申込方法 郵便振替 東京0-46143「アジアの女たち
の会」へ**会員申込み**と明記して下さい。郵
送の場合は必ず**50円切手**をお願いします。

編集後記

編集後記

一 号の機関誌が、大変好評のうちにまたたく間に二千部を売りつくし、新たに千部を増刷し編集にかかわった人たち全員が「苦勞のしがいがあった」と喜んでいま、読者、会員の人たちからも多くの感想や励しなどをいただいたあたりがとうございまして。その間会員も三百五十名を越え、あまりの反響の大きさに責任の重さを痛感せずにはいられません。

二 号は予定よりも一カ月も遅れてしまひ皆様にご迷惑をお掛けしてしまいました。二 号では、アジア諸国において余りにもひどい日本の男たちの性侵略の美態を色々な角度から調査して特集を組みました。仕事を持っている女たちが限られた時間の中で調査や資料集め等をするものですから内容的に、不十分な点も多くあると思いますが、まあ、どんな批判や感想をお寄せ下さい。

☆ 会員の方にお願ひとお詫び
東京で九月〜十月にかけて「しばられた手の祈り」の上映活動を行いました。第一回は渋谷で九十

三、第二回は小金井で六十人と三回に渡つて場所を変えて行ない大好評のうちになることがきました。こうした上映会を地方会員の方々にもぜひ行なつていただき、運動を拡めていきたいと思います。参考のビラやチケットの見本もありますのでご連絡下さい。

また、地方でアジアの問題や女性解放の活動をしている方々との資料の交換や交流もしたいと思つております。それと機関誌を地方会員の方も、友人や知人に売つていただき、売ることによつて運動の輪が拡がればと思つております。連絡がいただければまとめて送付いたします。

会員の申し込みやその他の色々な人数が少ないため、返事などが遅れがちですのでお許し下さい。会員の申し込みを銀行振込で申し込んだ方は、お手数でもハガキで住所・氏名・職業・電話等をお知らせ下さい。当方の事務手際のため銀行振込の場合は氏名しかわからないので、この後は郵便振替番号（東京〇—四六四一四三）を作りましたのでこれでお願ひ致します（担当 須田）

原本 上海人民出版社

本書は中国において、実に四十万を数える
ハリ麻酔手術の臨床例を集め、ハリ麻酔の
最新技術と情報を網羅し、その粋を集めた決定版といえる。

発行 株式会社 東方堂 定価3,200円

監修 東京教育大学助教授 医学博士 森和 翻訳『針刺麻酔』翻訳グループ

住所 東京都文京区西片1丁目15-15
南部ビル3F TEL東京03(814)1992
口座振替番号 東京4-22721